



お伽訓話

玉の靴

とよ子

昔ある田舎の百姓家に梅子と云ふおとなしい女の子が居ましたうちが貧しい爲  
 學校も早く下り毎日／＼おとうさんのお手傳に山へ行つて木を拾つたり又お母  
 さんのそばで糸をつむいだりしてよくお手傳をしますのでほめない人はない位  
 でした。

梅子さんのお父さんも又大變に梅子さんを可愛がりどうかして立派な人にした  
 い、どうかして學校へもやりいろ／＼の女の道を習はせたいと一生懸命に働き  
 ましたがいつになつても梅子さんを裁縫にもやられませんでしたので或日おとうさ

んは。

「梅子やお前もこんなに大きくなる迄とう／＼何も教へて上げられなくて可愛憎だつたね、私ももう此年になつてはそうせつせと働く事も出来ないしそれから氣の毒だがおつかさんと一所に働いておくれ」

と涙をこぼして云ひ聞せました、それでなくてさへ孝心の深い梅子はどうかして年寄つたお父さんの安心なさるやうせつせと何かを覚え人に笑はれないやうになりたい、そしてお父さんの代りに働いて樂をさせてあげたいとそれからといふものは今迄より朝は早くおきて畑へ行き山へ昇り夜は母さんの側でお仕事やお習字をしたりして勉強しますのでお父さんもお母さんもお喜び毎日／＼樂しい日を送つて居りました

其年も暮れ梅子はどう／＼十八の春を迎へ可愛らしかつた子は美しい／＼娘となり何もかも出来ない事はなくほめない人はいない様になりました。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

ある暖かい春の日梅子はお母さんと椽で一生懸命にお仕事しておりますと今迄お隣へ遊びにいつていたお父さんがいそがしそうに歸つて來て

「梅子やあしたから三日の間王様の御殿で村中の娘を集めて色々の事をさせてお覽になり其中で一番何かのよく出来る美しい娘を王様のお子様におきめになるそうだ」

と云ふのを聞いてお母さんは

まあ／＼それはうれしい事梅の運がむいて來たと云ふものあしたは朝早くから行つておいで、今からお風呂をわかしませう」

と夢中によろこびましたがお父さんは心配そうに

「そんなにわけなく行かれるならいゝが御殿へ行くには紋付を着て行かなければ入れては下さらないそうだし、車にも乗せてやらなければならぬのだらふね」

と之を聞いてお母さんはがっかりしてしまいました梅子はお父さんやお母さん

の心配しんぱいして居ゐらつしやるのを見みて。

梅うめ おとうさんあたしちつとも王様わうさまのお子こになんかなりたくありません、こ  
うしてお父とうさんやお母かあさんのお側そばにいて可愛かあいがられ毎日まいにちくたのしく暮くし  
て居ゐるのが何なによりうれしいのですから、そんな心配しんぱいはなさらないで下ください」  
と云いひますのでお父とうさんもお母かあさんも少しは元氣げんきになりましたので梅子うめこもうれ  
しそうにいろ／＼のお話はなしなどして父母ふはを慰なぐさめて其日そのひもいつもの様やうに梅子うめこさんの  
お料理れうりで三人にんた楽しい夕飯ゆふはんをすましました。

やがて翌日あくるひになりますと近所きんじよの娘むすめたちは皆みなそれ／＼立派りっぱにして車くるまにのつたり馬  
車こへ乗のつたりして王様わうさまの御殿ごてんへと出掛でかけて行ゆきますのを見みてお父とうさんもお母かあさ  
んも又々またどうかして梅子うめこもやりたいが困こまつたものだとしきりに相談さうだんして居ゐます  
とどこからともなく一人ひとりの白髪はくはつのお爺おやさんが出て來きて。

「お前まへたちはふだんから誠まことによい心掛こころがけだし梅子うめこも大層たいそうよい子こだからけふ之これから  
王様わうさまの處ところへ行ゆかれるやうにしてあげやう」

と云ひますので二人は飛たつ許りよろこび。

二人「どうかく梅を仕合にして下さいましお願致します」

と拜まぬ斗りに頼みました、白髪のお爺さんは立つて臺所から古い、南瓜を一つ持つて來、手にして居たむちで一つうちますとそれが立派なく箱馬車になりました、やがて又、ビー／＼と少さく口笛を吹きますと六匹の鼠がチヨコ／＼と出て來ました其内二匹の大鼠の背中を軽く打ちますとそれが勇ましい馬となり馬車の前へいつてヂヤンとつきました、あとの二匹は二人の馬丁になり二匹は、御者になりましたのでお父さんもお母さんもびつくりして腰がぬけてモジ／＼して居ました。

梅子さんはさつきから臺所で一生懸命おひるのお仕度をして居ますと庭で馬の嘶く聲がしますのでヒヨツと見ますと立派なく馬車が一輛置いてありますので之もびつくり仰天し、何事かとお父さんのお部屋へ來て見ますとそこには一人の見た事もないお爺さんが立つて居て。

「お、梅子<sup>うめこ</sup>が丁度<sup>ちやうど</sup>よい處<sup>ところ</sup>へ來<sup>き</sup>たね今<sup>いま</sup>呼<sup>よ</sup>びに行<sup>ゆ</sup>かうと思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>た處<sup>ところ</sup>であつた、あなた<sup>あなた</sup>はふだんから誠<sup>まこと</sup>によい娘<sup>むすめ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>今日<sup>けふ</sup>はお褒<sup>ほ</sup>美<sup>び</sup>に王<sup>かう</sup>様<sup>さま</sup>の御<sup>ご</sup>殿<sup>でん</sup>へ行<sup>ゆ</sup>かれるやうにしてあげませう、さあ私<sup>わたし</sup>の側<sup>そば</sup>へいらつしやい」

と優<sup>やさ</sup>しくにこゝしながらおつしやるので梅子<sup>うめこ</sup>さんも何<sup>なん</sup>とはなしにうれしくうろ／＼と側<sup>そば</sup>へ行<sup>ゆ</sup>きましたらお爺<sup>おや</sup>さんはさつきのむちをあげて、梅子<sup>うめこ</sup>さんの衣<sup>き</sup>着<sup>もの</sup>物をそうつと撫<sup>な</sup>でましたら、まあどうでせう、今迄<sup>いままで</sup>はよごれてこそ居<sup>ゐ</sup>ないものゝ古<sup>ふる</sup>い／＼きたない衣<sup>き</sup>服<sup>ふく</sup>でしたのがそれは／＼美<sup>うつく</sup>しいとも立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>とも例<sup>たと</sup>へ様のな<sup>や</sup>い見<sup>み</sup>事<sup>こと</sup>の着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>になりました、髪<sup>かみ</sup>はきれいな束<sup>たき</sup>髪<sup>はつ</sup>になり薄<sup>うす</sup>桃<sup>もも</sup>色<sup>いろ</sup>のリボンは蝶<sup>てふ</sup>の羽<sup>は</sup>のやうにヒラ／＼飛<sup>と</sup>び、金<sup>きん</sup>の櫛<sup>くし</sup>はチャンとさゝるし帶<sup>おび</sup>にはピカ／＼と金<sup>きん</sup>鎖<sup>ぐさり</sup>が光<sup>ひか</sup>り、指<sup>ゆび</sup>には眞<sup>しん</sup>珠<sup>じゆ</sup>やルビーの入<sup>はい</sup>つた指<sup>ゆび</sup>環<sup>わ</sup>がいくつもはまり足<sup>あし</sup>には奇<sup>き</sup>麗<sup>れい</sup>な／＼硝<sup>がら</sup>子<sup>す</sup>の靴<sup>くつ</sup>がはけてしまひ、何<sup>なん</sup>ともかとも云<sup>い</sup>ひ様<sup>やう</sup>のない立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>なお姫<sup>ひめ</sup>様<sup>さま</sup>になつてしまひました。

お父<sup>とう</sup>さんもお母<sup>かあ</sup>さんももう／＼うれしくて／＼たまらず、立<sup>た</sup>つたり居<sup>ゐ</sup>たり、い

つの間にか腰の抜けたのも直り前へ行つたり後へ廻つたりして喜んで居ましたやがてお爺さんは。

「さあ之でもういゝから早くいつていらつしやい、けれども此立派な姿も四時迄で時計がチン／＼と打ち終るとすぐもとの古い衣服に變つてしまふから其前にきつ／＼と歸つて來なければいけませんよきつとね」と堅く／＼教へたかと思ふともをどこかへ行つてしまいました。

梅子はいそいで馬車に乗りますと勇ましい二頭の馬はソロ／＼と庭を引立て御殿の方へと馳けて行きます、お父さんとお母さんも其影も見えなくなる迄見送り。

「あゝありがた／＼ふだんから正直にして居たので神様が助けて下さつたのだ」

と大よろこびして居りました」

さて梅子はいつの間にか御殿へつきますと廣／＼お座敷には美しいお嬢さん

だちが、編物をしたり、花を活けたりいろ／＼の事をして居るとそばに王様は御覽になつていらつしやる處でしたが梅子さんがそろ／＼とは入つて來ましたのを王様は御覽になり。

「お、／＼よい娘が來たさあ之を縫つて御覽」

とおつしやつて立派な布を御出しになりました、梅子さんは一生懸命に縫つて居ますと王様は一寸も側をはなれず見ていらつしやいましたが。

「お、お前は大層上手だ」

とおほめになりますので今迄いた人だちはがつかりしてしまつた位です其内に二時も打ち三時となりもを五分で四時になる處でしたので之は大變うか／＼して居られないと王様も少し縫つてとおつしやるのを、無理にお断して大急ぎ馬車でうちへ歸り玄關へ上ると四時をチン／＼／＼と打ちましたが、あ、不思議、花のやうな梅子さんの姿は又元の衣物になつてしまいました、それから其日の様子をお父さんやお母さんに御話していつもよりもたのしい夕方の食



事をしまいました王様は一番お氣に召した子が歸つてしまいましたが、でもをけふは之でよさうとおつしやつてお部屋へ御入りになつてしましました。

又翌日になりますと梅子さんは神様が來て今日の通りのお仕度をして下さいましたので御殿へ行きお仕事をして居ります處へ王様がお出になり。

「おゝきのふの子がよく來たさあけふは之を造つてくれ」

とおつしやつていろく造花の材料をお出しになりましたので梅子さんは又々一生懸命櫻だの牡丹だのこしらへて御目にかけますので皆それが王様の御氣に叶ひほかの人だちの方へは一寸もいらつしやらない位でしたが四時にならない中にうちへ歸りました。

あともを一日、ほかの娘さんたちは朝早くから御殿へ來て。

「花子さんあの四時前に歸る娘さんはどこの方でせうね立派な御様子の上なんでも大層よく御出來になると見え王様に大變お氣に入つた様ですね、あたしだちはもをだめでせうか」

とくやしさに云ひました花子さんは。

「ほんとうにあの子はあたしたちの邪魔ですなけふこなければよいのに」

などと云つて居ます處へ梅子は又入つて來ました、そしてわき目もふらず一生懸命に、花を作つて居ります處へ又王様が入つていらつしやいました。

「けふは繪を書いてごらん」

とおつしやつて紙や筆や繪の具やらを御出しになりました、お仕事や外の事は平素お母さんに習つてよく知つて居りましたが繪などは一度も書いた事がないのでどうしようかしら出來ませんと云つたら王様が御叱りになるだらうし、へたの物を書いて笑はれるのもつらいしあゝ困つた、やつぱりこんな處へ來ないでお父さんやお母さんの側に居た方がよかつたと獨り心配して居ました、梅子さんがもちくして居るのを見た他の人たちは。

「あゝうれしいけふこそあたしたちが上手に繪を書いてほめられやう」と皆書き初めました。

時間<sup>じかん</sup>はどんくたつし繪<sup>え</sup>はちつとも出來<sup>で</sup>ず泣<sup>な</sup>きたい位<sup>くらゐ</sup>に心配<sup>しんぱい</sup>して居<sup>ゐ</sup>る處<sup>ところ</sup>へ後<sup>うしろ</sup>へ來<sup>き</sup>て手<sup>て</sup>を取<sup>と</sup>つて下<sup>くだ</sup>さる方<sup>かた</sup>があります、梅子<sup>うめこ</sup>はびつくりして振<sup>ふ</sup>り返<sup>かへ</sup>つて見<sup>み</sup>ますといつもの神様<sup>かみさま</sup>で。

「少し用<sup>よう</sup>があつて來<sup>き</sup>てやられず可愛憎<sup>かあいさう</sup>だつたもう安心<sup>あんしん</sup>おしさあ書<sup>か</sup>かしてあげやう」

といゝながら手<sup>て</sup>を持<sup>も</sup>つてどんく書いて下<sup>くだ</sup>さいましたから見て居<sup>ゐ</sup>る中<sup>うち</sup>に美事<sup>みごと</sup>な景色<sup>けいしき</sup>が出來<sup>で</sup>上<sup>あが</sup>りました、王様<sup>わうさま</sup>は益々<sup>ますます</sup>御機嫌<sup>ごきげん</sup>よく。

「おゝ見事<sup>みごと</sup>なのが出來<sup>で</sup>た之<sup>これ</sup>は上手<sup>じやうず</sup>だ、さあも一枚<sup>まい</sup>」

と又御出<sup>またおだ</sup>しになるのでおしまいにはも心配處<sup>しんぱいところ</sup>か面白<sup>おもしろ</sup>くてたまらずつひうかくと四時<sup>じ</sup>の打<sup>う</sup>つのを知らずに居<sup>ゐ</sup>ますと今<sup>いま</sup>しも時計<sup>とけい</sup>がチンくくくくと打<sup>う</sup>たうとする處<sup>ところ</sup>驚<sup>おどろ</sup>くまい事<sup>こと</sup>か之<sup>これ</sup>は大變<sup>たいへん</sup>どうしやうあゝ困<sup>こま</sup>つたと繪筆<sup>えふで</sup>も紙<sup>かみ</sup>も打捨<sup>うちす</sup>て長<sup>なが</sup>い廊下<sup>らうか</sup>を走<sup>はし</sup>つて御門<sup>ごもん</sup>の處<sup>ところ</sup>へ來<sup>き</sup>ましたが、見<sup>み</sup>るといつも待つて居<sup>ゐ</sup>た馬車<sup>ばしや</sup>は影<sup>かげ</sup>も形<sup>かたち</sup>もなく古い南<sup>みな</sup>瓜<sup>ちや</sup>が一つころがつて居<sup>ゐ</sup>て鼠<sup>ねづみ</sup>が六匹<sup>むっぴき</sup>チョコ／＼と溝<sup>みぞ</sup>の中<sup>なか</sup>へ走<sup>はし</sup>つて行<sup>ゆ</sup>

きましたおやもを四時打つてしまつたか大變くと一生懸命馳け出してうちへ歸りました。

お父さんもお母さんもいつになく梅子の歸りが遅いので心配して居ります處へはだして息をきらして歸つて來ましたので安心したもののもしや御殿で姿が變つたのではなかつたかと心配しました。

さて王様は

「三日の間で氣に入つた子はあの四時前に歸つた娘だそして一番おしまいの日碇子の靴を忘れていつた子だからあの靴のはける娘をさがせ」

とお侍に御命令なさいましたので早速御門の處へ靴を出し。

「此靴のはけた物が王様のお子様になるのだ」

と書いて出しましたのでどうかして、はきたいと方々の娘たちが來て足を入れて見ますが大きかつたり小さかつたりして丁度よい人は一人もありません。

梅子さんの處でもお父さんやお母さんが早くいつておはきくとおつしやいま

すが行くに着物<sup>きもの</sup>はなしこんな姿<sup>すがた</sup>でいつてもはかしてはくれないしとあきらめて居<sup>ゐ</sup>ましたが。「國中<sup>くにどう</sup>の娘<sup>むすめ</sup>でどんな貧<sup>み</sup>しい處<sup>ところ</sup>の子<sup>こ</sup>でも來<sup>き</sup>てはけ」と云<sup>い</sup>ふお布令<sup>ふれい</sup>が出<sup>で</sup>ましたのでとう／＼梅子<sup>うめこ</sup>もお母<sup>かあ</sup>さんに連<sup>つ</sup>れられて行<sup>い</sup>きました、見物<sup>けんぶつ</sup>して居<sup>ゐ</sup>る人<sup>ひと</sup>たつは。

「おやあの子<sup>こ</sup>は孝行<sup>かうぎやう</sup>娘<sup>むすめ</sup>の梅<sup>うめ</sup>ちゃんの様<sup>よう</sup>です、ね今迄<sup>いままで</sup>來<sup>き</sup>なかつたと見<sup>み</sup>える」

「あの子<sup>こ</sup>は誠<sup>まこと</sup>によい子<sup>こ</sup>だが可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>そうにとてもあの靴<sup>くつ</sup>ははけまい」

など申<sup>まを</sup>して居<sup>ゐ</sup>りましたが之<sup>も</sup>々梅子<sup>うめこ</sup>さんに神様<sup>かみさま</sup>が下<sup>くだ</sup>さつた靴<sup>くつ</sup>でしたものだ丁度<sup>ちやうど</sup>きつちりに合<sup>あ</sup>いました。

王様<sup>わうさま</sup>はこれ<sup>これ</sup>を聞<sup>き</sup>いてお喜<sup>よろこ</sup>びになる國中<sup>くにどう</sup>の人<sup>ひと</sup>だちは。「梅子<sup>うめこ</sup>さんは誠<sup>まこと</sup>に感心<sup>かんしん</sup>な娘<sup>むすめ</sup>だつたから神様<sup>かみさま</sup>が助<sup>たす</sup>けてあげたのだ、あゝよかつた、めでたい／＼。と皆<sup>みな</sup>々喜<sup>よろこ</sup>んでくれましたのでお父<sup>とう</sup>さんもお母<sup>かあ</sup>さんもお大<sup>おほ</sup>喜<sup>よろこ</sup>び梅子<sup>うめこ</sup>さんはどう／＼王様<sup>わうさま</sup>の御<sup>お</sup>子<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>になりいろ／＼の學問<sup>がくもん</sup>もさせて頂<sup>いた</sup>き幸<sup>さいはひ</sup>に暮<sup>くら</sup>しましたとさ。

めでたし／＼